

私は2校目に小学校から中学校へと異動し、中学3年生を前に国語の授業をしなければならないという窮地に立たされた。「明日の授業をどうしよう」という状態であった。そこで、私がすがったのが「ワークシート」である。「ワークシート」を作成すると、教材研究をしたような気分になった。1時間の授業の流れができる。最初はこわくて、「ワークシート」なしでは授業ができなかったのである。

だが、そのうちに気づかされた。「ワークシートはだめだ」と。生徒の思考を教師の都合のいいように導き、生徒の思考を狭めてしまう。「これならノートで十分だ」と思うようになった。あの頃の私は“ノートは思考の運動場”であることを理解していなかったのである。それでも、1単元のワークシートをつくることで、単元構想を考えるようにはなった。また、ワークシートとノートとの関連を考えるようになった。

ワークシートばかりに頼っていると、生徒のノートには、日付と学習課題（めあて）しか書かれないことがある。授業で使ったワークシートは、その後どうなるのであろうか。ノートに挟んでおく。そして、そのうちになくなる。とりあえずファイルに綴じておく。生徒は、最初から2穴パンチで穴が開けられていると、綴じてくれるものである。他にもノートに貼っておく。いろいろな方法があるが、生徒も面倒なことは嫌なのである。いちいちノートに貼るのは大変である。それも、ワークシートのまわりを切らないと貼れないなどというのはやめてほしいのである。

年度の途中でスタイルを変えるのはよくないかなと考え、結局1年間は「ワークシート」を使い続けた。そして翌年、中学校勤務2年目の私は「ワークシート」と決別し、それを捨てることにした。そうすると、構造的な板書など、板書についても考えるようになり、グループ活動など学習形態を工夫するようになったのである。

しかし、このグループ活動での話し合いがうまくいかない。当たり前である。そもそもグループになる必然性がなかったのである。話し合う価値のある課題ではなかった。グループになる目的とゴールがあやふやだった。司会者を決めてみたり、発表する順番を決めてみたり、マニュアルをつくってみたりしたが、さっぱり効果が上がらない。そもそも学習課題、発問がだめだったのである。

そこで、ようやく学習課題と発問を吟味するようになった。私の授業は「教える・与える」が中心だった。これだと、生徒はどんどん受け身になっていく。考えなくなっていく。授業は「気づかせる・引き出す」なのである。これは、授業改善の方向性でもある。生徒に話し合わせることで悪戦苦闘し、何とか自分の授業を活性化したいと熱望していた私の前に、ふとしたきっかけで「ディベート」というものが現れた。「これだ」と思ったことを今でも覚えている。

これからは、「トーク・チョーク」あるいは「トーク・チョーク・ワーク」の授業は減っていくことであろう。そうなるためには、教員の授業に臨む姿勢が重要である。多くの先生方が、近い将来、「昔は『トーク・チョーク・ワーク』だったなあ」と笑い話にできる日がくるよう、生徒主体の授業を目指し、教員としての気概と矜持をもって授業に臨みたいものである。